

子どもがつくる出生の物語

—フロイト「ある五歳男児の恐怖症分析」(1909)の副旋律—

秋山茂幸

はじめに：ハンスという性＝生の謎の探究者

子どもは、自らがそして人間一般がどこからやってくるのかという謎に対して、自らが納得し“腑に落ちる”ような物語をつくり上げる。それは、単なる子どもの空想というだけではなく、“科学的な事実”を知っている——“腑に落ちているか否か”はひとまず問われない——大人においても無意識に棲み続ける重大な物語であり、人の一生において何かしらの意味を持ち続けてゆくものだろう。精神分析の祖フロイト (Sigmund Freud 1856-1939) は、人間そして自己の起源に関して打ち立てられる一つの物語を〈子ども—うんこ〉論という形で提示している。ここでは、「ある五歳男児の恐怖症分析」(いわゆる「ハンスの症例」) [Freud 1909=1969]¹⁾を読み解くことでその物語の意味を探ってみたい。この症例分析をフロイトが発表した主要な動機は、もちろん、自身のエディプス・コンプレックス (もしくは、去勢コンプレックス) 理論を証明することであり、これまでもそのように読解されてきた²⁾。しかし、ここではその議論の本筋を念頭に置きつつも、それとは異なった側面から光を当てたい。すなわち、ハンスがどのような起源の物語を、いかにして創作したかという視点から本症例報告を読み解くことを試みる。ハンスは妹ハンナの誕生を契機にある思考作業へと駆り立てられることになる。「彼の目の前には、子どもはどこから来るのか、という大きな謎が現われ出てきたのである。これはたぶん、その解決のために子どもの精神力が要求される最初の問題であり、テーベのスフィンクスの謎はおそらくこれをただ歪曲した形で描き出しているだけなのかもしれない」[364-65=265]。本論考においてハンスは、性＝生の謎の探究者として位置付けられる³⁾。

ハンスの治療プロセスは、フロイトを信奉する父親が五歳の息子ハンスとの会話をメモにし、そのメモに対してフロイトが分析を施すという特異な形式を持っている⁴⁾。したがって、そこで展開される解釈はフロイトと父親の共同作業の産物であり、またそれは精神分析が常にそうであるように、患者ハンス自身の創作した物語であるともいえる⁵⁾。本症例分析のテキストは、まず何より父親とハンスの間で交わされた問いかけと応答の繰り返しを提示してゆくことに主眼が置かれ、フロイト自身の言葉は最後になって少しばかりまとまって表明されるにとどまっている。本稿においてもフロイトに倣い、父と子の間で交わされた対話を取り上げながら、それらを編みなおすことをこそ第一義的な目的として据えたいと考える（なお、以下の引用に表れる「私」は報告者であるハンスの父親、「彼」はハンスを指している）。

1. 副旋律：物語の編みなおし

この物語は、ハンスが家の外に出ることができないという父親の報告から始まる。ハンスの家の正面には消費税税関の倉庫があり、そこには一日中馬車が行き来し、木箱を運び出している。ハンスの恐怖の対象は、この馬である。ハンスは表通りを行き来する家具運搬車、石炭運搬車、乗合馬車などの馬に嘯まれるのではないかという恐怖を抱く。さらに、母親と出かけた折、馬が転倒するのを目撃し、それからというもの馬が常に転倒するのではないかという不安に襲われてしまう。

この馬に対する恐怖の背景には何があるのか。さまざまなストーリーが折り重なり合いながら複雑に展開してゆくプロセスそれ自体が興味深いのだが、ここではまず、フロイトが提示したエディプス・コンプレックスという「答え」へと一足飛びに到達しておこう。すなわち、ハンスにとって（荷物を積んだ大きな）馬とはまさに父親（と象徴的に等価なもの）である。馬に対する恐怖は、父親への恐怖だ。そして、馬が倒れることは父親の死を意味する。母親を独占したいがゆえに父親の死を願望するハンスは、馬に嘯みつかれること、すなわちそのような願望を持ってしまった自分が父親から罰せられることを恐れているというわけである。これはエディプス・コンプレックス論にそった典型的な解釈であり、本症例分析に流れる主旋律である。

以上の教科書的な理解を確認したうえで、ハンスによる出生の物語の創作

過程を検討するために、あらためてテキストの細部へと戻ることにした。それは、本症例分析においてエディプス論と平行して流れながらも、断片的かつ暗示的にしか姿を現さないもう一つの物語、副旋律の抽出作業であるといえる。周知のごとく、フロイトのテキストは後続の様々な解釈者によって繰り返し引用されてきたが、ここでの引用はそれらがあまり取り上げてこなかったようなある意味で「偏った」ものとなっており、フロイト自身の言葉に関しても注記として補足的に語られているような細部にこそ重きが置かれることになるだろう。しかし、その「偏り」の集積こそが一つの意味を発生させるのである。

1.1. コウノトリの箱：容器と中身というモチーフ

フロイトの表現にしたがうと、「ハンスの人生における大事件」なるものが、彼が三歳半を迎えたときに起きている。それは妹ハンナの誕生である。そのときのハンスの様子は父親によって以下のように書き留められている。

午前五時、陣痛がはじまると、ハンスのベッドは隣室に運ばれる。そこで七時に目を覚まし、妊婦の呻き声を聞いて、こう尋ねる。『ママはなぜ咳をしているの?』——しばらくして、『今日はきっと、コウノトリが来るんだね』。

コウノトリが女の子か男の子を運んできてくれるということは、むろんここ数日来しばしば彼は聞かされていた。だから耳慣れない呻き声を、彼はまったく正しく、コウノトリの到着に結びつけたのである。

(そして、出産後：引用者)彼は部屋のなかに呼ばれる。しかしママを見ずに、まだ部屋のなかに置かれている真赤な水の入った容器を見る。(中略)彼は目にするもの一切に、不信な緊張した顔つきをする。そして、コウノトリに対する最初の不信が彼にうえつけられたのは疑いをいれない。[248=176-77]

ハンスの探求は、この「疑い」から始まる。コウノトリの物語が「嘘」であることを薄々感じつつも、それを完全に否定することができないハンスは、代わりとなる「答え」を探す旅に出る。やや意地の悪い言い方をすれば、エディプス論に回収されるがために用意されたといっても過言ではないハンス

の物語は、そこから逸脱する残余においてこそ興味深い展開を見せる。

コウノトリに対する不信を抱くハンスは、あらためて母親の妊娠という身体的な変化を思い起こしながら、何とか自分なりに納得できるような理論を組み立てようと努力する。ここで、母親が妊娠中に、ハンス一家が避暑のためグムンデンを訪れたときの記憶をハンスが辿ってゆく場面をみてみよう。

『ハンナはこんな箱に入れられてグムンデンについて行ったんだ。いつも僕たちがグムンデンに行くときは、あの子は箱に入ってついて行ったんだよ。またぼくのいうことをほんとうにしないの？ ほんとなんだよパパ。ぼくのいうこと信じてよ』

[304=219]

ここでハンスが主張する事柄の裏にあるのは、妹ハンナの出産・誕生以前にもハンナは存在したはずだという予感である。それも、母親の妊娠中、箱のような何かしら容器のようなものに入れられた形で、自分たちと共に存在したというわけである。フロイトはここで次のように注釈している。「箱はもちろん母胎 (Mutterleib) である。(中略) 神話の英雄たちが捨てられる小箱もまた、ザルゴン・フォン・アガーデ王以来、他の何物でもない」[304=220]。容器とその中身というモチーフは、母胎と胎児の対を表現する基本的な型として精神分析に繰り返し現れるものである。続いて、このモチーフとコウノトリの物語を重ね合わせながら何とか筋の通った物語をつくり上げようとするハンスの努力をみてみよう。

ハンス 『ねえ、あの子はここにまだいなかったときでも、もうとっくに生まれていたんだね。コウノトリのところでもう生まれていたんだね』

私 『ちがうよ。コウノトリのところにはきっとまだいなかったんだろう』

ハンス 『じゃ誰が運んできたの？ コウノトリがあの子をもってきたんだよ』

私 『それじゃあ、コウノトリはあの子をどこから運んできたの？』

ハンス 『そりゃ、コウノトリのところからさ』

私 『それじゃあ、コウノトリはあの子をどこに持っていたの？』

ハンス 『箱の中。コウノトリの箱の中』

私『その箱はいったいどんなふうなの？』

ハンス『赤。赤く塗ってあるの』（血？）

私『いったい誰がお前にそういうことを言ったの？』

ハンス『ママだよ——ぼくが考えたの——本に書いてあるよ』

[308=222]

ここでハンスはあらかじめ自分の中で作り上げた物語を父親に語っているわけではない。ハンスは父親との会話の中でこそ、混乱しながらも自分なりの理論を組み上げてゆく。それは、数少ない道標を手かがりにして、暗い道を行きつ戻りつしながら手探りで歩いてゆく様を思わせる。ハンスに与えられた道標は、コウノトリの物語、母親の出産場面に纏わる周辺的な体験の記憶（母親の呻き声や血の入った汚物入れ）、妊娠中の母親の身体的変化などといったものである。ここで父親はさらにハンスに問いかける。

私『それであの子はいつ、コウノトリのところで、コウノトリの箱に入ったの？』

ハンス『箱で出かける前までずっと長いことなの。もうとっても長いことだよ』

[311=224]

ここでハンスは、いまここに存在しているものが存在していないところから、どのようにして存在するようになったのかという問題に突き当たっているのだろう。起源を巡る問いは、「存在しないこと（無）」を回避しながら、“むかしむかし”へと無限に延長されてとりあえずの落ち着きをみる。

1.2. 〈子ども—うんこ〉論：離脱してゆくもの

ある意味で、ここまでの「コウノトリ」を軸とした父と子のやり取りは、子どもがつくる出生の物語の典型的な展開を見せているといってもよいだろう。精神分析が本領を発揮するのは、ここからである。話は〈うんこ〉を一つの重大なモチーフとして展開してゆく⁶⁾。ここではまずハンスの馬に対する恐怖に戻りながら、あらためて父と子の間で交わされた会話に着目してみよう。

私『なぜお前そんなにびっくりしたの?』

ハンス『だって馬が脚でこうしたんだもの(床に伏せて、じたばたする様を見せる)足で大騒ぎをした(Krawall machen)から、ほく、びっくりしたんだ』

[285=204-05]

馬が転倒し暴れて死ぬのではないかという不安は、先述したように父親が倒れて死んでくれればよいという願望と隣り合わせの罪悪感からくるものとしてとりあえずは解釈される。しかしながら、この「足で大騒ぎをする」という動作に関して、議論の主旋律であるところのエディプス論の文脈からは次第にズレを見せながら話が展開してゆくことになる。

私は彼に、どんなときに彼が足で「大騒ぎをする」のか私にはわかっているという。彼は私をさえぎって言う。『そうでしょう。ほくが「怒った」(Zurm)ときや、うんこ(Lumpf)しなくちゃならないのに、もっと遊んでいたいときだね』(怒ると彼はむろん足で乱暴をする、すなわち、地団太をふむ習慣がある)

[288=207]

ハンスはある時期から、突如としてその関心を(うんこ)へと大きく焦点化してゆく。別の例を引いておこう。ハンスは、母親の黄色と黒のパンツを見て、何度か「べっ」といい、床にひれ伏して唾を吐いたという。

私『どうして「べっ」なんて言ったの? ぞっとしたの?』

ハンス『うん、それを見たから。うんこをしなくちゃならないんだとほく思ったの』

[291=209]

母親のパンツに対する嫌悪感の背景には、ハンスの(うんこ)に対する特別な感情がある。ここでは何より、それらが身体から分離してゆくものであるという点において連絡していることに注意しておきたい。ハンスは(うんこ)と同様にパンツという身体から離脱するものにこそ不快感を示す。

そして再び「足で大騒ぎをする」というフレーズの問題に戻ろう。父親は、これを(うんこ)と結びつけて次のように解釈している。

乗合馬車の馬が倒れて、足で大騒ぎをするというのはおそらく——大便が下に落ちて、そのとき音をたてるということなのであろう。排便に対する恐怖である。重い荷を積んだ車に対する恐怖はそもそも重く詰まったおなかに対する恐怖と同じなのである。 [300=216]

話の主旋律において、ハンスの恐怖の対象であるところの馬、それも大きな馬や荷物をたくさん積んだ馬車は、父親が置き換えられたものとして解釈されていたが、ここにおいて、別の旋律が姿を現し始める。すなわち、重い荷を積んだ馬とは、〈うんこ〉が詰まった人間の身体（おなか）を表しているのではないかという解釈である。「足で大騒ぎをする」という動作は、ハンスに排便を想起させている。〈うんこ〉が詰め込まれた馬が「足で大騒ぎをする＝排便する」ことに対して、ハンスは嫌悪・不快感の感情を抱き、恐れを抱くのである。フロイトは、それを「うんこコンプレックス (Lumpfkomplex)」 [358=261] と呼んでいる。

そして、ここでは、コウノトリの箱（容器）とその中身というモチーフが異なる形で繰り返されていることに気づく。すなわち、身体（おなか）＝内臓する箱、うんこ＝内臓される中身というわけである。さらに、このモチーフは様々な連想によって置き換えられ変奏されてゆく。すなわち、時には馬や車の方が〈うんこ〉として捉えられるのである。

彼がふたたび、目と鼻の先の構内の門から車が出てくると恐がったとき、私は尋ねたことがあった。『この門はお尻みたくに見えないかい』

彼『そして馬はうんこだ』その後彼はいつも、車が出てくるのを見るという。『ほら、“うんち (Lumpfi)” が来たよ』Lumpfiという言い方を普通は彼は決してしない。愛称語のような響きがある。義姉は自分の子をいつも Wumpfi と称んでいる』 [302=218]

上のやり取りでは、税関の構内が容器であり、そこを出入りする馬や車がその中身である。そして、身体から〈うんこ〉を排出する門、すなわち肛門も連想されていることが注意される。ハンスの恐怖が馬車や車、鉄道にまつわるものであることから、フロイトが「ハンスの空想が『交通 (Verkehr)』という観念を中心にして動いている」 [319=231] と指摘していることには注

意しておきたい。〈うんこ〉なるものと「交通」の問題、「門（もしくは扉）」を通じて内と外の「交通」が“開かれること”と“閉じられること”。肛門とは人間の身体における内と外、自と他の接点の形象にして「交通」の門・扉に他ならない⁷⁾。

そして、引用の最後尾において、〈うんこ〉とは一体何であるのかが示唆されることになる。すなわち、〈うんこ〉と〈子ども〉は象徴的なレベルで連絡しているのである。フロイトは〈子ども—うんこ〉という並列関係を端的に指摘し、ハンスにとって妹ハンナは、まさに〈うんこ〉であると述べている。「子どもというものは幼児性欲理論にとっては“うんこ”である」[309=223]。そして、「幼いハンナ自体がうんこであり、すべての子どもたちはうんこであり、うんこのように生まれてくるということである」[360=262]。

では、あらためて、ハンスはなぜ〈子ども〉であるところの〈うんこ〉に嫌悪を覚えるのか。ハンスは、あるとき父親に懇願して次のように言ったという。すなわち、コウノトリにお金をやって、子どもたちの入ってる大きな箱から、もう一人も子どもを運んでこないようにしてもらいたいと。そして、妹ハンナに関して生まれてこなかったほうがよかったという。

私『あの子が生まれてこなかったほうがよかったのなら、お前はあの子がちっとも好きじゃないんだね』

ハンス『うん、うん（同意しつつ）』

私『だからお前、ママがあの子をお風呂に入れているときに思ったんだね、ママが手を離せばいいのに、そしたらあの子は水の中に落ち込むのに……』

ハンス（補足して）——『そして死ぬのにつて』 [307=222]

両親の愛情を、自分から奪ってゆく妹という存在に対する反感。人が自らに後続する弟・妹の死を主に無意識のレベルで願望するというのは精神分析において周知の事柄である [Freud 1917a=1969]。ここにおいて、ハンスの馬、そして馬車に対する恐怖のもう一つの背景が明らかになる。

通りでハンスは私に語った。乗合馬車、家具運搬車、石炭運搬車は、コウノトリの箱を運ぶ車である、と [316=229]

そしてフロイトは確認する。「つまりそれは、妊婦ということである」[316=229]。ここにおいて、副旋律が明確にその姿を現した。馬や車は、時には、〈子ども—うんこ〉の入っている「大きな箱=母胎」、そして時には〈子ども—うんこ〉自体なのであって、ハンスの馬恐怖は排便に対する恐怖であり、すなわちそれは、〈子ども〉が新たに生まれることに対する恐怖なのである。フロイトの最終的なまとめを引いておこう。「重そうな馬や重い荷物を積んだ馬の転倒ということの中に彼が見ていたのは他でもない——分娩、出産（niederkommen）であったかもしれないということが解かるのである。倒れる馬はしたがって、死んでゆく父だけではなく、出産のときの母親でもあったわけである」[360-61=262]。

1.3. 一人称の誕生：ウロボロスの物語

以上で、ハンスの馬恐怖の背景にある副旋律を浮かび上がらせ編みなおす作業は一つの区切りを迎える。ハンスが組み上げた出生の物語は、〈子ども〉は箱・容器としての身体・母胎の内部にはるか以前から貯蔵されており、その中身があるとき〈うんこ〉のように排出される——正確に言えば、〈子ども〉と〈うんこ〉は象徴的に等置されるのだから、〈うんこ〉として排出されるというべきであろう——というものであった。

であるならば、ハンスは必然的に次の問いの前に連れ出される。では、妹ハンナが母親の〈うんこ〉として生まれ出たように、ハンス自身も自分が母親の〈うんこ〉として排出されたものと考えたのか。どうやら、話はそれほど単純ではない。これは、いわば二人称・三人称的な事柄と一人称的な事柄を、素朴に重ね合わせることが可能なかという問いだといってよい。他者の出生をいかに受け止めるかということと、自己の誕生を受け止めるという実存的な問題の間には、容易に乗り越えられないような壁がある。物語の創作者がその主人公となると、自己の起源の問いに対して〈うんこ〉なるものとして排出されたということを認めないようである。それは、自らの起源が〈うんこ〉という〈もの=物〉であることに対する拒否であり、産み落とされるという決定的な客体性・受動性の拒否だといってよいだろう⁸⁾。

再びテキストに戻りつつも、少しばかり迂回しよう。フロイトは、ハンスが〈子ども〉を持つことに対する憧れを持っているという。ここで、ハンス

が想像上の自分の〈子ども〉⁹⁾をつくり出すことで、自己を(母親のように)〈子ども〉を所有するもの、そして排出する=産み出すものとして、物語る場面を見てみよう。

私『じゃお前は、自分がママだと考えたんだね?』

ハンス『ほく本当にママだったんだ』(中略)

私『でも、子どもができたっていうけれど、誰からできたと考えたの?』

ハンス『もちろん、ほくからさ』(中略)

私『お前が便器に腰かけて、うんこが出てきたとき、子どもができたって、お前思った?』

ハンス(笑いながら)『うん。××通りのときも、ここでも』

[329-31=239-40]

〈子ども〉は〈うんこ〉として排出される以上、当然ハンスも〈子ども〉を持つことができる。それによって、ハンスは母親と同一化するわけであるが、自らが母親である以上、生み出した架空の〈子ども〉は自分の弟妹でありつつ、それは自分自身を指しているのではないだろうか。このような解釈を可能にするのは、自己の起源に関する物語の立ち上げについて、ハンスが以下のように物語っていることによっている。それは、父親が生殖・出生といった事柄を説明するため鶏は卵を産むという説明をしたことを受けて、ハンスがさらなる物語づくりに苦闘する場面である。まず、ハンスは父親が卵を産んだのを知っているという突飛な主張をした後、その話を翻して今度は自分が卵を産んだと言い始める。

ハンス『ちっともほんとじゃないよ。でもほくはもう卵を産んだことがあるんだ。そうしたら鶏がとび出したんだ』

私『どこで?』

ハンス『グムンデンでほく草の上に寝ていたの。ちがう、膝をついていたの。すると子どもたちはちっともこっちを見ていなかったから、とつぜん朝ほくはいったの。探してごらん、みんな、きのうほく卵を産んだよって。そうしたらとつぜんみんなが見て、そうしてとつぜん

卵を見つけて、そして卵から小さなハンス (ein kleiner Hans) が出てきたの。パパ、いったい何を笑ってるの？ ママはそれを知らないし、カロリーンも知らないんだ。だってだれも見えていなかったんだもの。そうしてとつぜんぼく、卵を産んで、とつぜんそこにいたんだ』

[321=232]

ハンスは自身が誰から産み出されたのかという謎と、自らが排出する者すなわち産み出す者でありたいという願望との間に、何とか折り合いをつけようとしている。「とつぜん」という言葉の多用は、話の短絡を埋め合わせようとするハンスの苦闘の跡だろう。そして、ついにハンスは自らが「小さなハンス」を産み出したという物語をつくり上げるのである。自己を産み出し所有する者は、自己にとって起源であるところの他者である。しかし、自己の二重化（主体＝客体としての自己）によって、産み出される物は産み出す者となり、所有される物は所有する者となる。ハンスの自己の起源をめぐる実存的な物語は、ウロボロスの環を描くことで一つの終幕を迎えた¹⁰⁾。

2. 副旋律からの逆照射：去勢の原像における転倒

ここからは、明るみへと連れ出された副旋律から逆に主旋律を照射するような作業に入ろう。それによって、主旋律からこれまでとは異なる音色が奏でられるのを聴取することができるはずである。

とはいったものの、実はフロイト自身も後年、この副旋律の重要性に気づくことになった。以下は、1923年に追加された注釈である。「乳児はすでに母親の乳房が毎回ひっこめられるのを去勢、つまり重要な、自己に所有権のある身体の一部 (seinem Besitz gerechneten Körperteils) の喪失と感じるにちがいないということ、規則的な便通もやはり同様に考えざるをえないこと、そればかりか、誕生行為 (Geburtsakt) がそれまで一体であった母親からの離別として、あらゆる去勢の原像 (Urbild) であるということが認められるようになった」[246=175]¹¹⁾。われわれはここに、去勢なる概念の源流をみることができる。すなわち、去勢とは「自己に所有権のある身体の一部の喪失」をさす。「身体の一部」とは、〈ペニス〉、〈うんこ〉、〈乳房〉であり、母親ですらある。これらは、自己の一部でありながらも、身体から離脱してゆ

くことで他なる〈もの〉と化すものである¹²⁾。ここまで〈うんこ〉と〈子ども〉の等価性に関して記述してきたが、ここに〈ペニス〉を加えてよい。「無意識の産物（思いつき、空想、症状）においては、糞便（金銭、贈り物）、子ども、ペニスという三つの概念は区別しにくく、相互に混同されやすい」[Freud 1917b: 404=1969: 386]。時間的に遡るならば、〈ペニス〉の分離という出来事の起源には〈うんこ〉の分離、そして産み落とされたときの分離という出来事がある。すなわち、去勢の原像は誕生という分離・喪失にこそあるというわけである。

ここで特に、誕生という母親からの離別のプロセスを考察するため、少しばかりフロイトを離れて、R. D. レインの議論を簡略に取り上げてみたい。レインは『生の事実』（1976）において、「いつ「私」は始まったのだろうか。いつ「私」は終わるのだろうか」、「私はどこから来たのだろうか。そして私はどこかに行こうとしているのか」、さらに「私とは何であろうか。私は存在するのであるか」等々といった「生（Life）」にまつわる問いと思索に関連して、非常にユニークな考察を展開している。

まず、レインは誕生以前の生、すなわち受精から着床をへて誕生に至るまでのプロセスに着目し、「誕生以前の経験は誕生後の経験よりもより多様性に富んでいる」[Laing 1976=2002: 57] と述べる。そして、受精卵が細胞分裂を行いつつ卵管を子宮腔に向けて下降し、子宮内膜に着床するというところから始めて、胎児期が辿る冒険的なプロセスを神話の手を借りつつ語っている。それは読む者を戸惑わせる叙述であるが、以下の一説は非常に示唆的である。「乳房—口唇期に先立って胎盤—臍帯—子宮という発達段階が存在する可能性があるのだろうか。（中略）私はかつて「私」が胎盤であり臍帯であり胎児であったという事実によって圧倒される。多くの人は胎盤と子宮とを混同しているように思われる。胎盤、羊膜、臍帯（胎児の「膜」のすべて）は細胞的に、生物学的に、身体的に、発生的に私である。へその緒が切られた時私が子宮に残してきたすべて、私から切り離されたすべてについて、同じことがいえる」[ibid.: 93-94]。

まず、ここでレインが「私」の問題を、母胎から排出された（誕生）後のみではなく、それ以前にも延長し、同一平面において語っていることは注目に値する。そして、レインが描く誕生とは、私の一部としての何かから引き裂がされ、私の一部を喪失するような出来事なのである。レインにお

いて、〈胎盤〉（をはじめとする胎児の膜のすべて）は「私の 私一でない私」、「過渡期以前の対象」であり、排泄物を受け取り栄養物を供給する大地のような場所でありつつ、〈乳房〉や〈他者〉とパラレルに位置づくものとして描かれている [ibid.: 98-100]¹³⁾。

レインに迂回することで見えてくるのは母胎からの排出が私にとっての喪失に他ならないということの仔細である。そして再びフロイトの指摘に戻ろう。フロイトの述べる、〈ペニス〉、〈乳房〉、〈うんこ〉といった自己にとっての他なる〈もの〉のなかで、母親だけは特殊な位置をしめている。私（の一部）であって私から離別して他なる〈もの〉となつてゆく〈胎盤〉は、確かに母胎の一部ではあるかもしれない。しかし〈胎盤〉は、母親という存在それ自体ではない。「母親からの離別」が去勢の原像であるというのは、とても奇異な物言いである。そのとき身体の一部を喪失する「私」とは何者／何物なのだろうか。母胎という容器から中身が排出されることは、母親という産み出す主体にとっては「自己に所有権のある身体の一部の喪失」かもしれない。しかし、フロイトはここで根本的な転倒を起こしている。中身にとって容器が、排出されるものにとって排出するものが、喪失され他なるものと化すというのだ。〈ペニス〉や〈うんこ〉は私にとっての一部ではあるが、母親と私という関係においては、私は母親の〈うんこ〉のように母親にとっての一部にすぎない。

さらに、そもそも「私」は誕生（排出）以前の母親などと出会うことができるのだろうか。そのとき母親は「私」を取り囲む世界全体でありつつ、「私」自身と繋がった存在である以上「私」自身でもあり、さらに言えば他者が存在しない以上「私」などという言葉も本来は成立しえない¹⁴⁾。すなわち、「私」は母親を喪失することはできない。

去勢不安とは、「私」の一部が「私」から分離し喪失する場面を思い描く者が抱く不安である。しかし、誕生における喪失とは、「私」の一部の喪失などではない。「私」は誕生という喪失によってこそ生まれてくるのである。

ハンスが出会ったのは、自己自身が何者かにとっての他なる〈もの〉にすぎないという、「私」なる存在の不確かさではないだろうか。「人が、そして自己自身が、どこからやってくるのか」という謎と出会うとき、子どもは（そして我々は）この「私」が非在へと呑み込まれてゆくというある種の「形而上学的な不安」¹⁵⁾に襲われると考えても何の不思議もないだろう。

おわりに：実存的な「いのち」の問題系

死生学において、死の問題は三人称の知識や情報として論じられるばかりではなく、一人称・二人称の問題としても語られなければならないとされてきた¹⁶⁾。であるならば同様に、もう片方の生（そして性）の側、すなわち誕生や「いのち」の問題も単に客観的な事柄としての生だけではなく、（自我や意識といった三人称的・客観的なものではない）「この私」の誕生、本人が我が事として内側から感じる「いのち」についても語られねばなるまい。それは、スピリチュアルな次元における誕生、そして実存的な「いのち」の問題といえるだろう¹⁷⁾。

その意味で、ハンスの物語づくりのプロセスは、ハンスという「この私」による誕生や「いのち」に関する実存的な探求であったといえよう。確かに、コウノトリや〈うんこ〉の物語は、いずれ“科学的な”知識によって暗闇へと葬り去られることになるだろう¹⁸⁾。では、ハンスが出会った不思議、そしてそこからくる恐れや不安の感情は我々自身にとって無縁のものとなってしまふのであろうか。

レインは次のように述べている。「私がこの文章を書いており、こうした考えを思い浮かべている等々の事実は、私の最初の細胞から始まったこの相互作用（環境との出会い：引用者）の結果である」[ibid. : 28]。レインが述べる「細胞」と「私」との間には、目が眩むような距離がある。現代の生命倫理・死生学の議論も、この自明な事実の不思議に留まりつつ、素朴な驚きや慄きを抱えながらなされるべきであろう。それが、「この私」とは何の関わりもないただの三人称の論理ゲームにすぎない、のではないのならば。

文献

秋山茂幸 2006 「性愛・自他・死生——〈エロス・タナトス〉再考」（『次世代死生学論集』東京大学21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」）

小此木啓吾 2002 『フロイト思想のキーワード』講談社

西平直 2003 「スピリチュアリティの位相—「教育におけるスピリチュアリティ問題」のために—」（『臨床教育学の生成』皇紀夫編著、玉川大学出版部）

- 西平直 2005 『教育人間学のために』 東京大学出版会
- Erikson, E. H. 1958 *Young Man Luther: A Study in Psychoanalysis and history*, W. Norton & Company, Inc.=2002 『青年ルター』 (1) 西平直訳、みすず書房
- Freud, S. 1905 *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*, G.W.5.= 1969 『性理論三篇』 著作集5
- Freud, S. 1907 *Zur sexuellen Aufklärung der Kinder*, G.W.7.= 1995 「子どもの性知識によせて」 (『性愛と自我』 金森誠也編訳、白水社)
- Freud, S. 1909 *Analyse der Phobie eines fünfjährigen Knaben*, G.W.7.= 1969 「ある五歳男児の恐怖症分析」 著作集5
- Freud, S. 1917a *Eine Kindheitserinnerung aus "Dichtung und Wahrheit"*, G.W.12.=1969 「『詩と真実』 中の幼年時代の一記憶」 著作集3
- Freud, S. 1917b *Über Triebumsetzungen, insbesondere der Analerotik*, G.W.10.=1969 「欲動転換、とくに肛門愛の欲動転換について」 著作集5
- Freud, S. 1922 *Nachschrift zur Analyse der kleinen Hans*, G.W.13.= 1983 「ハンス少年分析記後日談」 著作集9
- Freud, S. and Oppenheim, D. E. 1958 (1911) *Dreams in Folklore*, translated by A. M. O. Richards, New York, International University Press. (=S.E., Vol. 12, pp. 177-203) =2001 「民間伝承の中の夢」 (『夢と夢解釈』 金森誠也訳、講談社)
- Gay, P. 1988 *Freud: A Life for Our Time*, W. W. Norton & Company, Inc., New York / London.= 1997, 2004 『フロイト』 (1・2) 鈴木晶訳、みすず書房
- Lacan, J. 1964 *Le Séminaire de Jacques Lacan Livre XI: Les quatre concepts fondamentaux de la psychoanalyse*, Éditions du Seuil, Paris. =2000 『精神分析の四基本概念』 小出浩之他訳、岩波書店
- Laing, R. D. 1976 *The Facts of Life: An Essay in Feelings, Facts, and Fantasy*, New York, Pantheon Books.= 2002 『生の事実』 (新装版) 塚本・笠原訳、みすず書房
- Singer, P. 2003 *Pushing Time Away: My Grandfather and the Tragedy of Jewish Vienna*, New York, Ecco.

註

- 1) 以下、本テキストからの引用に関してはドイツ語版全集 *Gesammelte Werke* (Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag)、人文書院版著作集の頁数のみを=でつないで示す。

- 2) 本症例分析の目的は、より具体的には『性理論三篇』(1905)で提示した主張の証左を得ることにあるとフロイトは言う [336=244]。しかし、フロイトはここでそれ以上の問題に突き当たったと思われる。そういった推察を可能にするのは、フロイトが『性理論三篇』に1915年の段階で一つの節を新たに追加しているためである。それは、第二篇「幼児の性愛 (Die infantile Sexualität)」の第五節「幼児の性探究 (Die infantile Sexualforschung)」 [Freud 1905: 95-97=1969: 56-58] であるが、そこでは子どもがつくり上げる「出生の理論 (Geburtstheorien)」、すなわち「子どもがどこから来るか (Woher kommen die Kinder?)」という謎に対する知的探究について言及されており、明らかにハンスの症例分析を受けた上で記述されている。なお、同時期に綴られた性教育に関する文章「子どもの性知識によせて」においても、明らかにハンスから得られた材料をもとにしつつ、人の由来について子どもが抱く疑問について述べられている [Freud 1907=1995]。
- 3) 西平直は、死と性という人生の両極の問題について以下のように述べている。「死んだらどうなるの」という問いに対する戸惑いと、「どうやって生まれるの」という問いに対する大人の側の戸惑いでは、一体、何がどのように違うのか。つまり、性を語ることに含まれる「やりにくさ」から、逆に、死を語る問題を問い直し、それを通して「いのちを語る」困難を確認したいと思ったわけです」 [西平 2005: 94]。本稿は性や存在の謎、そして「いのち」の語りの一つのケース・スタディであるともいえる。
- 4) ここで基本的な事実関係を確認しておくと、父親はフロイトの主催する研究会、水曜会に参加していた音楽学者マックス・グラフ、母親はかつてのフロイトの患者である。すなわち、二人はフロイトの最も初期の弟子にして信奉者であったといってよい。また、ここでハンスと呼ばれている少年は、後にアメリカに移住しニューヨークのメトロポリタンオペラのステージディレクターを務めたヘルベルト・グラフ (Herbert Graf) である [Gay 1988=1997, 2004]。彼は十九歳のときフロイトとの邂逅を果たすことになるが、そのときこの当時のことを、ほとんど記憶していなかったとされている [Freud 1922=1983]。
- 5) もちろんここで、ハンスの症例に対して繰り返されてきた批判が想起されるべきである。端的に言って、それらの批判は事例報告が何ら客観的な証拠となるものではなく、フロイトの分析も事後的かつ恣意的なものであって、それが治療につながったとは言いがたいというものである。本症例分析のみではなく、精神分析それ自体に対して同様の批判が繰り返されてきたといってよいだろう。対して、本稿のスタンスを述べておくと、フロイトの分析が

普遍的妥当性を持つものかどうか、またその分析が治療に寄与したと言い得るのか否かという問題の検討は、ここでの主題としていない。そして、ハンスの物語を通じて客観的かつ一般的な子どものあり方について認識できるなどという想定もしない。ハンスが語る出生の理論は、いわば分析家と患者（大人と子ども）の共同作業によって創られた精神分析的物語であるといえるかもしれない。しかし、科学的事実の世界だけではなく、「コウノトリ」の世界にも生きる我々のあり方を描き出してくれる“一つの”パースペクティブとして、精神分析以上のものを私は知らない。

- 6) フロイトは糞便 (Kot) ではなく、〈うんこ〉 (Lumpf) というハンスの造語を、自身の理論を展開するにあたって使用している。本稿ではそれに従い、幼児語といってもよい〈うんこ〉を筆者自身の文章においても用いることにする。ちなみに、精神分析の術語を翻訳するに際し、いわゆる“アカデミックな”表現や“上品な”言い回しをあてることで削ぎ落とされてしまう側面があることはもっと注意されてよい。
- 7) 肛門と口唇は、自他・内外の交通をつかさどる扉である。フロイトが提起したエロスとタナトスという力は、この二つの扉の開閉原理であるといえる。換言すれば、二つの扉は愛と憎しみという「アンビヴァレンツ」が現れる原初の場なのである [秋山 2006]。
- 8) 象徴的な等価性によって、“ママが〈うんこ〉をする”は“ママが〈ぼく〉をする”になる。自らが「される〈もの〉」であったかもしれないということに対する戸惑い、驚き、慄きについては特記されてよい。
- 9) ハンスの架空の子どもには「ローディ」という名前がつけられている。ハンス自身の言によれば、その由来はソーセージ、ザファローディ (Saffalodi) すなわち直腸の腸詰にあるという。フロイトは、このことは〈子ども〉と〈うんこ〉が等価であることを示唆すると述べている [363=264]。このような見解は、一見言葉遊びに過ぎないようにも見えるが、フロイトは次のように述べている。「大人に較べると子どもが言葉をどれほどより物的に扱うか、それゆえに子どもにとっては言葉の同音がどれほど意味深いものであるかを決して忘れてはならない」 [293=211]。
- 10) ここには、父なる他者を内面化することで主体が立ち上がるといったエディプスの議論とは異なり、母なる他者と同一化することで立ち上がってくる自己の姿が描かれているともいえるだろう。
- 11) しかしながら、フロイトは終生エディプス・コンプレックスの第一義性・普遍性の主張を撤回することはなかった。そのこと自体はここでは問題としない。すなわち、ここではファルス中心主義を批判したり、それにかわる異

なる原理を提起しようなどという意図はない。ここで試みるのは、フロイトの立つ場所を別のパースペクティブから見ようとする、それのみである。それは、父子関係を中心軸にそこから母子関係を照らし出そうとしたフロイトに対して、逆ベクトルからの照射を試みることだといってもよい。

- 12) 本稿では、一連の〈もの〉を表わす用語に関してはグユメで括った。
- 13) ラカンの対象aが想起できよう。「乳房は——対象が自分かが曖昧なものとして、哺乳動物に特徴的なもの、たとえば胎盤と同じように——個体が生誕の時点で失った彼自身の一部、もっとも古い失われた対象を象徴することのできるものを表しています」[Lacan 1964=2000: 264]。本節の考察の背景にはラカンの議論が念頭にあるが、誕生の問題に集約して考えるなら、フロイトと同時代人の理論、すなわち「出生外傷」の概念を提起したO. ランクや、ルー・アンドレアス、A. シュテルケ、F. アレクサンダーの議論こそ改めて検討されねばなるまい。さらには、古澤平作、小此木啓吾によって展開された阿闍世コンプレックスの議論に登場する「未生怨」の概念も関連が深い。別稿で論じたい。
- 14) 「私」と「母なるもの」の関係は、「自我=私 (Ich)」と「エス=それ (Es)」の関係とパラレルである。
- 15) 「形而上学的な不安」なる概念は、エリクソンによる。「自分の生物学的起源について、私たちは様々に空想しながら上手に防衛している。ところが、自分がかつてまったく存在していなかったという事実の前には、為すすべがない。とりわけ親の助けがない場合、子どもはまったく無防備にその事実の前に連れ出されてしまう。幼児の空想や様々な民族の神話の中で人間の誕生が神秘的な起源として扱われるのは、存在という「形而上学的」謎を「いつ・いかに」という疑問によって覆い隠そうとする試みとさえ言えるかもしれない」[Erikson 1958: 107=2002: 171]。また、以上の文脈において「実存的アイデンティティ (existential identity)」なる概念が提起されていることは注意されてよい。
- 16) そもそも精神分析とは、フロイト自身の自己分析から立ち上がってきた知である。そしてフロイトが頑なに主張する科学性が、その実、一人称・二人称の問いを徹底して掘り下げるという作業によってこそ裏づけられているという点に精神分析の特有性がある。小此木啓吾は、フロイトの自己分析の最大の課題は父ヤコブの死に対する喪の仕事であったと指摘し、「この喪の仕事は精神分析の起源であるだけでなく、むしろフロイトの心の中で続けられた精神分析の発展そのものになっている」と述べている [小此木 2002: 170]。

- 17) 西平直は、スピリチュアリティの一つの位相に「実存に関わる事柄」があるとし、それは、「本人が我が事として内側から主体的に自覚する時に初めて、事柄として姿を現す」という [西平 2003]。
- 18) どうにも座りが悪いのだが、本来、本論部分に入れるべき注記をあえてこの結末部分の一つ挿入しておきたい。本稿では〈うんこ〉と誕生・「いのち」の連関について考察したが、〈うんこ〉は死とも結びついている。フロイトは、オッペンハイムとの共著『民間伝承の中の夢』において、「排泄の欲求が死の不安に結びついている」と述べている [Freud, S. and Oppenheim, D. E. 1958 (1911) = 2001: 124]。この共著者デビッド・オッペンハイムは、フロイトの水曜会に参加していたユダヤ人の古代語学者であり、強制収容所で死亡している。そして、生命倫理学者ピーター・シンガーの母方の祖父である [Singer 2003]。筆者は、このフロイトと同じ世界に生きた祖父に対してシンガーが抱く複雑な感情や、祖父の生涯がシンガーの倫理的な立場に及ぼす影響について叙述する準備が未だ整っていない。

(あきやま・しげゆき 研究拠点形成特任研究員)

Child's Narratives of Birth: The Hidden Theme in S. Freud's *Analyse der Phobie eines fünfjährigen Knaben* (1909)

Shigeyuki Akiyama

The purpose of this article is to examine the child's narratives of birth in S. Freud's *Analyse der Phobie eines fünfjährigen Knaben* (the case of "Little Hans").

In 1908, five-year-old Hans developed an acute and worsening fear of horses, thus affording Freud a precious opportunity to study the Oedipus complex. Freud believed that he had obtained in Little Hans a direct confirmation of his theories. Likewise, after Freud's research, most following studies have regarded this case as one of the most typical examples of Oedipal theory.

However, this article focuses on the other side (hidden theme) of this case. Hans may have been doubtful as well as sensitive about the way in which one (his younger sister Hanna and he himself) was created and his doubts about birth were transformed into anxiety. We can always counter any doubts about our origin with ordinary defenses and typical fantasies. This study will demonstrate how Hans narrated the birth of Hanna and himself. Particularly the main stress falls on the first person's (existential) perspective of one's birth. Consequently I retrace the steps of the development of the "I" and step down and back to the borderline where the "I" emerged from its maternal matrix.